

# 樋口一葉『にぎりえ』論

三十五回卒 平生典子

## 目次

序

本論

第一章 『にぎりえ』の人間たち（略）

第二章 お力の生

第一節 お力の「思ふ事」

第二節 お力の死

第三章 お力の「自我」（略）

結

参考文献

序

「『にぎりえ』は誠にわからない名作である」とは、助川徳是氏の言である。この「わからない名作」に魅きつけられた多くの研究者、読者たちによって、早くから数々の論文、書物が発表され、現在に至っている。しかし、これほど多くの作品が発表され、研究の内容も

詳細を極めているのに、この作品の「わからなき」（助川氏）はかえってその真相を奥に入りこませてしまったように思われる。ということは、まだ研究の余地が大いに残されているということである。

そこで私も川底に沈んだ“真相”とやらを探して『にぎりえ』に足を踏み入れることにした。本論では、先達の遺した作者論に教えを請いながらも、あくまで作品に即したお力像、その内面の核心に迫っていききたい。

第一章 『にぎりえ』の人間たち（略）

第二章 お力の生

第一節 お力の「思ふ事」

面ざしを冴えて見せるお力の本性とは何か、お力の言う「持病」とは何なのか。又毎夜、お力を眠れなくさせる「色々の事」とはどういう物思いなのか。そして、お力を身悶えさせ、人心地つかなくさせるまでの情念とは一体何であ

ったのか。お力の心情は攔みようがなく、それこそ濁り江のように澄むことは難しい。混沌とした胸の内なのである。宿命観や遺伝の狂気の性、志向などをめぐる意見の多様さも又そこから生まれている。しかし、これといった極め手がない現在の研究状況に乗じて僭越ながら私見を述べてみたい。

思うに、お力の心は絶えず二種の葛藤に悩まされていた。現実を厭い、今の境遇が自分のあるべき境遇ではない、という漠とした上昇志向と、父祖がそうであったように自分も転落の人生を生きるよう運命づけられているという宿命観との葛藤が一つ。そしてもう一つは、「我ゆゑ死ぬる人のありとも御愁傷さまと脇を向くつらさ他處目も養」った酌婦としての所業に開き直ろうとする気持ちと、それを「悲し」く「恐ろし」と思う人情・義理を知ってお力の心情との葛藤であった。この二つの葛藤はそれぞれにつながりを持っており、故に一層お力の心をはぐりながら縛りつけていたのである。

そしてその上、「親ゆづり」という「氣違ひ」の性がお力に孤独を強いていた。その性は反骨という父祖の血統を七歳の時の貧窮体験がはっきりと目覚めさせたものであった。お力の心の葛藤を知る人として誰もなく、それが一層お力の孤独感を煽っていた。

こうみてくるとお力が自らの観念によっていかに自身を拘束しているかということがわかる。お力には現実の境遇を脱するどんな方途も思い浮かばなかった。自分の絶対的

な観念によって逃れようがない、と信じ込んでいるのである。言わばお力は、知らず知らず自分に暗示をかけていたとでも言えようか。

さて、そのお力の内面に渦巻く二種の葛藤は、「洩らさじと包む」お力のこと、常には頭痛や持病となって表にあらわれ、お力はやっつとこのことで、それらを抑制し平静を保っていたのであるが、十六日の夜ついにその葛藤は抑えきれなくなり、お力の心の内を荒れ狂うのである。

常には抑制できたこれらの葛藤が、なぜこの日に限って抑えきれずにお力の心の内を支配してしまったのか。それはその夜が、精霊が年に一度この世に帰ってくるというお盆の夜であったということと無関係ではない。お力が父祖のことを、父祖の無残な死のこともっとも強く思い起す時、また自分の宿命の影のことも身近に迫って感じられる時がお盆なのであった。

この夜は常にも増して宿命の観念がお力を捕らえていた。そして宴会の席で自ら唄った「我戀は細谷川の丸木橋わたるにや怕し渡らねば」という一節がお力の心を触発した。これ以前、お力の心はすでに一触即発の状態にあった。そうであるから、この端唄の一節を唄いさしたまま突如として「菊の井」から闇の中へ飛び出すことにもなったのである。

今西實氏が「お力にとって『我が恋は細谷川の丸木橋』は苛酷な現実の中で『我が生は細谷川の丸木橋』と同意であったらう」と述べておられるが、確かにそのとおりであ

ったと思う。

お力が「菊の井」を飛び出して以後の叙述は、当時から評価が高い箇所である。この箇所は、お力が内面の葛藤の嵐に悶える場面であり、又後で結城に「今夜は残らず言ひます」と自らの内面を語る前提ともなるところであるので、ここにお力の「思ふ事」の真相があらわれている。見るのは無理なことではあるまい。以下それを辿ってみよう。

まず独白の最初の部分「行かれる物なら此まゝに唐天竺の果までも行って仕舞たい、あゝ嫌だ嫌だ嫌だ、何うしたなら人の聲も聞えない物の音もしない、静かな、静かな、自分の心も何もぼうっとして物思ひのない處へ行かれるであらう」と死界を恋ひ、次の「つまらぬ、くだらぬ、面白くない、情ない悲しい心細い中に、何時まで私は止められて居るのかしら、これが一生か、一生がこれか、あゝ嫌だ嫌だ」という部分で現実を厭悪する。つまりここでお力の魂は、自分があるべき生を生きていないという嘆きを声にして叫んでいるのである。これは強まりくる宿命の観念に必死で抗おうとするものであっただけに、より強く激しくお力を悶えさせた。

と、そこへまた自分の唄う「渡るにや怕し渡らねば」という声はどこからともなく聞えてくる。ところがその唄声は、実はお力の内面の声だったのである。まるで己の宿命の生を唄ったようなその節を声にだして唄った時（外部から聴覚器官を伝わってやってきた時）は、お力の心は宿命に抗おうと、内面の葛藤を続けていたのであるが、又もや

同じ唄声が今度は自らの魂の奥底から聞えてきた時、お力は抗ってもどうしようもない宿命の重さに観念した。「仕方がない矢張り私も丸木橋をば渡らずはなるまい、父さんも踏かへして落て仕舞なされ、祖父さんも同じ事であったといふ、何うで幾代もの恨みを背負て出た私なれば為る丈の事はしなれば死んでも死なねぬのであらう」とは、そういうお力の諦念から出たことばである。

しかし、ここでお力の諦念を、魂の死んだ状態とみるのは早計である。なぜなら「情ないとても誰れも哀れと思ふてくれる人はあるまじく、悲しいと言へば商買がらを嫌ふかと一ト口に言はれて仕舞」と理解者をもたない己の孤独を確認しつつも「ゑゝ何うなりとも勝手になれ、勝手になれ、私には以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、私に以上考へたとて私の身の行き方は分らぬなれば、分らぬなりに菊の井のお力を通してゆかう」と宿命の転落の人生の家徴たる酌婦の所業に開きなおって生きて行くことを決意する。そしてこの決意で生き通すためには、それと対立する「人情しらず義理しらず」と思う心をも捨てなければならぬ。「此様な身で此様な業体で、此様な宿世で」「人並の事を考へて苦勞する丈間違ひである」ということばで、お力は再度自らに言い聞かせるのである。「親ゆづり」の「氣違ひ」で、酌婦の所業に染まり、宿縁で転落の生を運命づけられている身であるから、人情・義理などを考えて嘆くのはつらいだけである。それらを捨て宿命に開きなおろう、と。絶対的な宿命観の支配下に自分をおくことで、精神のバランスを保とうとしたとも考えられよう。

そう決心したお力の心にひしひしと孤独感が押し寄せ、ついにはそれが現実の存在感を喪失させるほどになる。その孤独感、存在感の喪失状態から救ってくれたのが結城であった。

思いの外の孤独感の大きさにうろたえたお力は結城に、いや結城こそに自分の事また父祖の無念さを理解してもらいたいと考える。常には他人を頼ろうとしない気概の持ち主が初めて他人に救済を求めるのである。そこにお力の孤独感の切実さがうかがわれる。

しかしそうしたお力の願いは失意に終わる。人並み以上に恵まれている結城に、お力のそのような密かな自負——自卑の裏に隠されてはいるが——が推し測れるはずがない。結城には、こんな下級な店の酌婦には望むべくもない出世、つまり玉の輿を望んでいるのだな、という程度にしかお力をとらえられなかった。「貧乏人の娘」「私等が家のやうに生れついたは何にもなる事は出来ないで御座んせう、我身の上にも知られます」というお力の言葉から、お力は貧からの脱出を願ひ、それを玉の輿の夢に託していると、裕福な結城が考えるのも無理はない。その自卑の言葉の裏に自負と矜持を読みとれるには、結城は裕福すぎた。「實体」さからお力の身を案じてはくれるが、真にお力を理解してくれる人間ではなかった。失意を抱いたお力は、それでもやはり酌婦として、宿命のまま生き続けるほかはなかった。

以上、お力の「思ふ事」について述べてきたが、これに関連して、お力の結婚願望の問題についても少し触れておきたいと思う。

お力にとって「出世」とは「氏なくして乗る玉の輿を意味することはいうまでもない。」<sup>(5)</sup> という岡保生氏の見解のように、お力の心を占める重大問題のひとつに「出世」としての「玉の輿」願望を見る説は少なくない。

しかしお力は、父祖の一生を語る前に「寧九尺二間でも極まった良人といふに添うて身を固めようと考える事もござんすけれど、夫れが私は出来ませぬ」「一口に言はれたら浮氣者でござんせう」と自ら結婚しようとしても出来ない女であると話している。それはなぜかという点、偏に「親ゆづり」の「浮氣者」の性のためだといふのである。つまり、「親ゆづり」の他人(世間)をあてにしない反骨精神が、貧窮によって培われた結果、お力は自分の一生を他人に頼むことができず、他処目には「浮氣者」ともみえようが、結婚生活に安住することができない。「相手はいくらもあれども一生を頼む人が無いのでござんす」という言葉は、そうしたお力の性を表わしていると言えよう。

お力に結婚の意志なり願望なりが全くなかったわけではあるまいが、それよりもまず自分の血統・宿命などという問題が心にのしかかっていた。そして、お力が結城に理解してもらいたかったことも、今井泰子氏の言われるように「酌婦を続ける『目的』や抱懐しつつける『志向』ではなく、社会の最底辺に落魄の生を費かねばならない『宿世』

換言すれば理解者もない生をかくあらしめている『原因』であったと思われる。それらが結城によって理解されず、失意を抱くことになるお力が、その後如何なる心理状態で結末を迎えるか、それは次節で改めて述べたいと思う。

## 第二節 お力の死

「お力の死」ということについては、その死に方、つまり源七による無理心中か、それとも合意の情死かという点に論が分れているようである。佐々木朋子氏が「『にぎりえ』考―結末部分の解釈について―」（広島女学院大 国語国文学誌）の中で関氏以後の研究者の説の分類を行っておられ、興味深い。

とはいえ、私にはそのうちの一つにお力の死をあてはめることはできない。ただ私に言えることは、少なくとも源七に会った時のお力に死ぬ気はなかっただろうということだけである。いかに、すべての希望を喪失し、暗い宿命の業を背負っていたにしても、お力はそれに開き直り、生きていく覚悟をみせていたからである。「この破局以前、お力はすでに自暴自棄になっており絶望的であり生ける屍であったのではなからうか」とする関氏の解釈に領けない所以である。

しかし、笹淵友一氏の言われるように、この小説において必要なのは、「事実の確認」ではなく「お力の運命に対する詠歎」を読みとることであると思う。だから私はここ

でお力の死に方をどうこう述べるつもりはない。大事なものは、お力の死、それ自身が意味することは何なのかということである。

前田氏はその著「『にぎりえ』の世界」の中で「無理心中か合意の心中かという問題設定も無用の詮索」であり、「お力と源七は彼岸の救済を約束されているわけでもなく、生き残った者たちの鎮魂の対象ですらな」いことを問題にされている。この合意の情死とも無理心中ともとれるとりとめのない噂話に関しては、他にも今井泰子氏の「お力の心情にもっとも遠い無責任な批評を噂の最初と最後に配し、それによって、この世に理解をえられなかったお力の孤独を強調する」という意見や松坂俊夫氏の「生きんとしては絶望の淵につき落とされ、絶望の中にも烈しく生を願ったお力の死においても人々には理解されない複雑な苦悩と孤独な姿」を示すものであるという意見がある。お力の死に様をめぐって論を展開された関良一氏も「お力の死をとりとめもない無理解な無責任な傍観者たちの言葉でとりまくことによって、彼女の悲劇を一層痛切に強調することが一葉の意図であったのではないか」という見解を示されている。

さて、その「お力の死」であるが、おそらくこれは執筆当初から予定されていたであろう。一葉が腐心したのは、「幾代もの恨みを背負て出た」お力の人生をどう父祖のそれと重ね合わせるか、ということであつたに違いない。

その目論は終章に見事に結実する。世間にへつらうこと

なく、反骨に生き、志と才能を持ちながらも、誰からも理解されることなく不遇のまま無念の死を迎えた父祖。その恨みを背負っているお力は、並の酌婦にはない気概を持ち、宿命に抗っていたが、宿命に絶対服従し開き直って生きていこうとした矢先、宿命の手が、父祖と同じく無念のまま世との訣別を強いたのである。

お力には「恨み」を託すべき血縁も残されておらず、自らは「幾代もの恨みを背負」ていただけに、三代の「恨み」無念さは、お力と共に永遠に闇に葬られてしまった。捌口を失ってしまった彼らの「恨み」は、人魂となる外、世間に残すことができなかつたのである。

「丸木橋」の唄を引いて「細谷川の丸木橋」にお力の生を例えるなら、お力の死とは、父祖と同じく、丸木橋から足を踏みはずして、下の濁り江に落ちることであつた。お力の願つた死とは、このようなあさましい死ではなかつた。その濁り江とは、父祖のように決して浮かばれない者だけが沈んでいる苦の世界であつたのだから。

一葉が「お力の死」で最初に意図したものは、めぐりめぐる宿命の悲劇だったのかもしれない。しかし、結果的にその意味するものは宿命の悲劇ばかりではなかつた。生においても孤独だつたお力が、死んでもなお孤独であることをここで強調しなければならなかつた。宿命の手に捕らわれた者には、いかなる救済の道もないことを言いたかつたのである。とりとめのない噂話の中にお力の死を放り込んだのも、こういう意図があつたから、と考えれば納得がい

く。

しかし、一葉はなぜお力に救済の道を与えなかつたのか。己の宿命のどうにもならぬことをお力で示したのか。三好行雄氏は「一葉と日本近代の底辺―『にこりえ』を中心に」の中で、「生活体験に支えられた彼女の発想は、悲劇を真に救済する論理や思想を内にふくんでいないし、また外に求めることも不可能だつた。(略)一葉文学のリアリティの根柢は悲劇の解決を放棄したところに成立する。」と述べておられる。お力の悲劇の解決を放棄する、つまり救済を放棄することは一葉は誰にも理解されなかつたお力の嘆き、無念のまま死んで行かなければならなかつた者の、死んでも浮かばれない世間への恨みを訴えたものではなかつたのか。

また、それはそのまま一葉自身の嘆きであつた。宿命観にとらわれ、暗い死の予感に脅えながら孤独をかみしめていた一葉がお力の死に託して訴え。その訴えが主張という形でなく、詠嘆という形でなされたところに、世間に期待することを虚しいと感じている一葉の諦念の態度をみることもができる。自分の挽歌を自分で歌わなければならなかつた一葉のそれは己の内に秘かに言い聞かせた嘆きであつたと言つてもいいだろう。

①「『にこりえ』覚え書き」『解釈と鑑賞』昭47・8)

で松下道夫氏が「現在の境涯が自分にとって正しい在り場所でないという自我の目覚め」という語を用いて

おられるのに賛意を示し、自分の言葉に置きかえて同意のことを述べさせていただいた。

2. 前田愛氏も著『にぎりえ』の世界(「立教大学日本文学」昭46・6)の中で、「お力の身の上話はたんに彼女の履歴」だけでなく、父や祖父の生き方と切り離すことができない宿縁の物語であった。お力自身の生は死者たちの幻影に二重三重にからめとられている。お力がその身の上話を語りはじめるとは、死者たちの世界に参入する何かのきっかけが必要であった、とすれば死者たちの精霊が年に一度この世に帰還する盂蘭盆こそ、お力の告白を促す契機でなければならぬ。丸木橋の唄とともに父や祖父の幻影にとらわれたことが、お力にとっての魂祭りなのであった。」と述べられている。
3. 今西實「『にぎりえ』の草稿をめぐって」(「山辺道」昭55・3)
4. 山本洋「『にぎりえ』の丸木橋」(「国語国文」昭53・4)に述べられているのを引用すると、「関如来」は私信で「文章円転盤上の珠」(樋口悦編『一葉に与へた手紙』)と褒め、田岡嶺雲は「神采の躍如」「入神の筆」(「葉女史の『にぎり江』)と絶賛し、小島鳥水は「頗る妙を極む」(「一葉女史」)といったような評価が当時からあったようである。

5. 岡保生「お力の死―『にぎりえ』ノートから―」(「学苑」昭45・11)

6. 今井泰子「『にぎりえ』私解」(「日本近代文学」角川書

店昭53・11)

7. 関良一「『にぎりえ』考」(「文学」昭29・7)

8. 笹渕友一氏は「『文学界』とその時代下」(明治書院昭35)で、「果して一葉はこのやうな合理的解釈を讀者に期待したであらうか。写実小説の観点からすれば真実はただ一つしかない。従って合意心中か、無理心中か、或はこれを調和させた関氏の解釈か、そのいづれかに片付けなければならぬのであらう。しかし事実の確認よりもお力の運命に対する詠嘆がその主題であるとすれば、無理心中であれ、合意心中であれ、心中の方法は大した意味をもたなくなるであらう。むしろそれを曖昧にしておくことよって、愛欲の神秘を印象づけ、余情を深めるとも考へられる。」と述べておられる。「愛欲の神秘」以下云々の箇所においては拙見と見解を異にするが、お力の死を「心中の方法」で片付けることを無意味とする意見に賛意を示したい。

9. 注⑥に同じ

10. 松坂俊夫「『にぎりえ』論」(「樋口一葉研究」教育出版センター昭45・9)

11. 注⑦に同じ

参考文献

。樋口一葉集 山本洋編 和泉書院 昭59・5

。『文学界』とその時代下 笹渕友一 明治書院

昭35・3

- 。樋口一葉研究 松坂俊夫 教育出版センター 昭45・9
- 。樋口一葉 考証と試論 関良一 有精堂 日本近代文学叢刊 昭45・10
- 。樋口一葉の世界 前田愛 平凡社 昭53・12
- 。お力の物思い 助川徳是 「近代日本文学会九州支部会報6号」 昭43・3
- 。お力の死―「にぎりえ」ノートから― 岡保生 「学苑」 昭45・11
- 。 「にぎりえ」の丸木橋 山本洋 「国語国文」 昭53・4
- 。 「にぎりえ」私解 今井泰子 『日本近代文学―作家と作品』 角川書店 昭53・11
- 。 「にぎりえ」考 佐々木朋子 「国語国文学誌」 昭55・12
- 。 一葉と日本近代の底辺―「にぎりえ」を中心に三好行雄 「国文学」 昭55・12